



< H25071121 >

注意事項

- 1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべてマーク解答用紙の記入欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。
- 4 試験開始後、氏名をマーク解答用紙の所定欄（一箇所）に記入すること。
- 5 マーク欄はつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでいいねいに、消し残しがないように消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	◎ 悪い	◎ 悪い
マークを消す時	○ 良い	◎ 悪い	◎ 悪い

- 6 試験終了の指示がでたら、すぐに解答を止め、筆記具を置くこと。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「これはわたしのものだ」。そのような所有の感情は、それなしにじぶんがありえないとおもわれるほどに、
△わたし△というものの存在の核をなしている。わたしの身体、わたしの持ち物、わたしの家、それらを他人が思いの
ままにするとき、わたしたちはじぶんの存在が否定された、凌辱されたと感じる。

それだけではない。じぶんの物と他人の物とを混同することは、社会の秩序を **A** 出来事となる。実際、自己の
生命と財産の私的所有が公的に認められていることが、長らく市民の自由の基礎とされてきた。その間に、国家が別の
国家を所有することもあった。そして二十世紀の世界は、公有か私有かという、生産手段の所有様式と生産物の分配方
法とによって、社会主義的な国家体制と自由主義的な国家体制とに大きく二分されてきた。

I、その所有の制度が、いま、社会のいろいろな場面できしみだしている。 **II**、土地がかつての高度成
長期やバブル期に投機の対象として統制不能なまでに高騰し、バブル崩壊後は企業にとつて不良資産として重い荷物に
なっている。マイホームも一生かけてローンを返済する条件でようやく手に入れられるささやかな「夢」の **B** で
あったが、バブル崩壊後の地価の下落で引越せば借金だけが残るといふさらにひどい状況になってきた。

知的所有権の問題も深刻で、著作権等の個人的権利の保護が厳密になされる映画のように、関係者が多く公開後の別
メディアでの放送権などもからんでくる事業のばあいには、費用と手続きがかさばって制作行為そのものが困難になる
状況も生まれてきている。

III、臓器移植。ここには、脳死体の、また（臓器提供・売買のばあいは）生きた身体器官の処分権がだれに帰
属するかという問題がある。身体の所有権をめぐることは、それが当ガイ対象の可処分権と同一視されて、いわゆる自己
決定の論理をかたちづくってきた。臓器の提供も、ファッションとしての身体変工（美容整形やピアシング）や「援助
交際」という形態をとった売春も、しばしば身体の自己所有という視点から正当化が試みられる。「わたしのからだは
わたしのものなんだから、わたしがどうしようも勝手じゃない」といふふうに。

最後に親権の問題、そして個としてのアイデンティティの問題。人生という時間のなかで、決定権をもつという意味
で△わたし△を所有するのはいったいだれなのか、△わたし△はどういう意味で家族に、会社に帰属するのか、あるい
はどういう理由でわたしのものなのか、といった問題がここにはある。このように、「所有」という概念と制度がいま
わたしたちの社会的な存在から個人的な存在まで、さまざまなレベルで問いなおされつつある。

さて、大野剛義に「所有」から「利用」へ」といふ著作がある。表題どおりの、社会の仕組みの大きな変換を提案
する本だ。

バブル崩壊後のデフレの時代には、保有資産のかなりの部分が負の資産、つまりは不良資産となり、「どれだけ資産
を『所有』しているかではなく、限られた期間に人、モノ、カネの資産をどれだけ有効に『利用』できるかで企業の優
劣が決まる」これが大野の基本的な主張である。

大野はここで、「所有」によってひと・モノ・情報との長期的・継続的で固定的な関係を表わし、「利用」ということ
でその柔軟で流動的な関係を表わしている。前者は事物との安定的な関係をもたすが、抱え込み・囲い込みによつ
て閉鎖的なものとなるのに対し、後者が可能にする速度と開放性をいま時代が要請していると説く。「所有」から「利
用」へ、このコントラストのなかで、日本経済がいま迫られている大きな変換を読み取るうといふのである。

したがって議論は、新たな所有論を展開するというよりも、むしろ所有型社会の病根を抉り、新しい利用型経営の構
想を描くという内容になっている。たとえば企業が社員を抱え込む仕組み（年コウ序列や終身雇用、企業内組合）、会
社間の株式持ち合いや系列関係、累進課税制度や過酷なまでの相続税や贈与税、含み益に依存した経営、退職金給与引
当金の計上方法や子会社を通じての利益操作の容認、土地に対する低率の固定資産税など、税制、会計制度じたいが資
産の保有に対して有利にはたらくような古い仕組みが、いまでは企業経営の足かせになっていると指摘する。そして高
収益、受注生産、顧客のニーズの変化に機敏に対応する営業、分社化によるスモールビジネスの集合体としてのネット
ワーク型経営など、彼のいう「利用」型経営のイメージを膨らませてゆく。

大野がここで指摘した、土地や株式資産をはじめとして「所有」そのものを自己目的化するような意識の刷り込みを、
思想の次元で取り上げるのは、熊野純彦の「レヴィナス」^(註)だ。この本は、ひととはじぶんでないもの、つまり他なるもの
をこそ所有するわけで、そのかぎりで所有は他の **C** であるが、わがものとして所有するとはその他なるあり方を

中断するということでもあり、そのかぎりでは **D** というかたちでの他なるものの否定に終わると主張する。その意味での所有の不可能性から、熊野はレヴィナスとともに「所有と定住」のあなたに思いをはせる。

何かをだれかのもんとして主張するその所有の根拠がどこにあるのか（熊野）、そしてわたしたちの社会の所有のかたちはいまだどういふ問題をはらみ、どういふ変革を求めているのか（大野）、その二つの議論のあいだを、これから埋めていかなければならないだろう。

（鷲田清一『死なないでいる理由』より）

注 レヴィナス……エマニユエル・レヴィナス（一九〇五～一九九五）。フランスの哲学者。

問一 傍線部1、2にあたる漢字がカタカナ部分に使われている語をそれぞれ次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- 1 ア 梗ガイ イ ガイ縁 ウ ガイ当 エ 障ガイ オ ガイ頭
2 ア コウ績 イ コウ的 ウ コウ湾 エ コウ率 オ 技コウ

問二 空欄 **A** に入るもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 日常的に麻痺させるような
イ 最初から無視する
ウ 根幹から揺るがすような
エ 決して認めない
オ 根本的に否定する

問三 空欄 **I**、**III** に入るもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ（同じものを二度用いてはならない）。

- ア したがって イ ところで ウ ところが エ たとえば オ あるいは

問四 空欄 **B**、**D** に入るもつとも適当なものをそれぞれ次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- B ア 実現 イ 象徴 ウ 存在 エ 投資 オ 営為
C ア 受容 イ 黙認 ウ 超克 エ 肯定 オ 放棄
D ア 異化 イ 同化 ウ 無化 エ 変化 オ 消化

問五 全体の論旨から判断して、傍線部 a「後者が可能にする速度と開放性をいま時代が要請していると説く」の内容に合致するものを次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 大野は「所有」から「利用」への変換は時代の必然であると主張する。
イ 大野は「所有」から「利用」への変換は今後速やかに進むと主張する。
ウ 大野は「所有」から「利用」への変換に伴い固定資産税は下げるべきだと主張する。
エ 大野は「所有」から「利用」への変換は人の意識を変えると主張する。
オ 大野は「所有」から「利用」への変換は経済を活性化すると主張する。

問六 傍線部 b「その二つの議論のあいだを、これから埋めていかなければならないだろう」の内容に合致するものを次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 「所有と定住」を超える所有の不可能性を議論する必要がある。
- イ 旧来の所有概念と異なる新しい所有概念を探す必要がある。
- ウ 所有から利用への理路を説明していく必要がある。
- エ 所有と利用のあいだに横たわる矛盾を克服する必要がある。
- オ 所有の根拠を社会制度との整合性にまでさかのぼって考察する必要がある。

問七 次の枠内の 1～3 にはこの文章の内容と合致しない記述があるが、それはどれか。その答えとしてもっとも適当なものをア～キから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- 1 身体の自己所有という視点からの売春の正当性は糾弾されてしかるべきである。
- 2 私的所有という制度はいずれ崩壊するだろう。
- 3 私的所有に対する見直しは困難を極めるにしても、行わざるをえないだろう。

- ア 1
- イ 2
- ウ 3
- エ 1と2
- オ 1と3
- カ 2と3
- キ 1と2と3

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ながいつながりだった。それが、死んで、断られて、私だけがこった。A とした、へんな気もちだった。

順ならば親がさきへ死ぬのはあたりまえな筈だけれど、そこんところがどうもすつと来なかった。どうしてははの方がさきへ死んだらう、なぜ私があとへのこったんだらう。昔つからきつい人で、なんでも私のかなう段じやなかつたものを、なんのわけでこんなに脆く折れてしまったんだか、なんとなく信じがたく腑に落ちかねた。一ツには数年来離れた土地に暮して会う折もなくいたせいもあるうけれど、死別のかなしみには実感が来ず、遠い感じばかりがしていた。それはなにかに似ている感じだった。よく知っている感じでいて、なかなか思いつかず、日かすが過ぎてから、ああ雪だなとわかった。雪が突然ざざと厩をすべり落ちた、あれによく似ていた。

身のまわりのものがそちの家から私の手もとへ移されて来た。血につながる子でなく、縁につながる母だったから、どちらにもそれ相應のしあわせがあった。怨んだり憎んだりした、それだけなら易しかろう。怨み憎みのひまひまに愛情もまざるとなつて、さて人と人とのあいだはむずかしい。ははにも私にも本来似ている性格があったし、なんにしても長年育てたり育てられたりしていれば、たがいにあくの強いところには惹き惹かれて似ても来るらしく、したがってよくわかりあい底いあひもした。が、はははおとなの潜めた執念ぶかさをもつて対していたし、私は若さのやりてんぼうを振りかぶっていたし、絶えず相似から来る葛藤、乖離から生じる親愛がくりかえされてい、むしろ他人ならうまく行ったかと考えられる組みあわせだった。しかし、ははと子の不和反感は奥深い観念から発生するように見えて、じつは愚にもつかない日常の雑事・感情からはじまって堆積していた。だから、かつて毎日見なれ、今またしばらくぶりで見ると、ははの世帯道具は、どれにもこれにも古い傷を語るしみが再現のなまなましを見させていた。筆筒が B としていけば、不機嫌で食事もせずすわり通っていたははの強情さを思いだすし、鏡がきらつとすれば、起つて行き際に C 癖をおもう。親子というもの、生活というもの、その根強さ、ずぶとさが古い道具類に浸み透っていた。なまじいに古傷をまさぐられるような苦々しさは濃く、死の哀感がかえつて薄く、がらくた片付けはいやなしごとだった。

赤い針さしが残っていた。

「かあさま、ちよつと来て見てよ。これ見て頂戴よ。」

見ると、いやなものだった。毛ともいえず針ともいえないものだった。無尽に絡みあつた毛のかたまりから、毳のようになが針が突き出ていた。のろのろとそこへすわり、見つめた。

「これをね、も少し小さくこしらえ直そうとおもつてほごいたんだけど、こんななんですもの、あんまり気味がわるくて——どうしようかと思つちやつて。」

なるほど、ほごいた赤いきれがあたりに散っていた。ゆるしを乞うような娘のまなざしが私を見た。

「これ、あたしが片付けるから玉子はもうおよし。」見のこして、娘は次へ起つて行った。

毒針のように用心してかかっているくせに、指は心の動きの猛々しさにひつかかつて、たびたびちくつとした。何度ちくつとしてもやめずに、一本一本抜いて行った。抜いても抜いても、かたまりはなおしんに固くしこつていた。からだのしんにぶすつと刺さつて私にままつ子の針一本が、たしかにふるえていた。伏兵のようにつんと出て来たり、しぶしぶ押し出されて来たり、毛は針に噛まれ、針は毛に畳まれているらしく、はてしなく思われた。

やりかけの洗濯もなにも忘れていた。完全に毛だけになったかと思うかたまりを、ゆっくりと、しかし大胆に、握つたり放したりして試み、私は満足だった。なごんだ気もちが、さらにその毛だまをも緩く解きひろげる作業をそそのかした。ややあつて緩みはじめた。そのときになつてはじめて、それがははの抜け毛ではないかと気づいた。しずまった胸にまた思いがのぼる。ひっぱると毛は抵抗を感じさせ、のち強靱にぶつと断れ、つづいて二本三本、長くひきぬけて来た。ははの髪は自慢に値する髪だった。これが何万何千本みごとに揃つて黄楊の櫛にすかれ、東ねる手から余つてこぼれた触感が、量感がおもい出される。

おやと思う。それが動いたようだった。風か？ 熟視し、それはほんとうに動いたのだった。陽に光りながら、ちょうど癖になった個処で、ごく僅かに浮いて反るものようだった。かたまりの中からほかのを引きぬいて、ちよつとそこにあつた白い包み紙の上に置いてためすと、毛はやっぱり陽を吸うと夢のようにふわつと動き、若い女の伸びをするすがすがが咄嗟に連想された。——火鉢のそばとか筆筒の隅とか a ——ほんの一寸睡りだけが深く寝入つて

— **b** — 本能的に頭だけを擡^{もた}げて — **c** — ずっと背なかで摺^すって畳を漕^こぐ — 幾分胸や腰が浮いて、爪さきから指までの線がぎゅうつと張る — **d** — 力が落ちて胸のカーヴが元のやわらかい平安にしずまる、そんな姿をまどわせて毛のかがまりは伸びをした。

若かったのはの寝姿、夏などよく簾の蔭^{すだれ}で寝入っていたその姿、竹に雀の模様のゆかたを着ていたつけ。

そのははは、くるつと畳に手をつけて、むこう向きに起きあがった。髪に手をやって、にこつとこちらへ振り向いた。機嫌のいい時にする、おどけた笑顔でこちらを見ている。 **D** そう言った。いえ、そう聞えたようだった。いいえ、それも違う、私がそう言わせたんです。でも、声はほんとうに天から降って来た、ほんとうに。

ははは「ままはは」という縛られから、にこつと笑って、はつきり脱^ぬけ出て行ったにちがいない。私もとうに、「まっ子」から解き放されていた筈だった。おもえば長いような、また短いようなつながりだった。死なれたのちの親子のつながりというのは、生前にくらべて、おそらく較べものにならないほどの遥けさになお続くのだろう。

(幸田文「髪」より)

問八 傍線部1「腑に落ちかねた」の意味としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 目星がつかない イ 腹立たしい ウ 気持ちが悪い エ 鵜呑みにできない オ 得心がいかない

問九 空欄 **A** と **B** に入るもっとも適当なものをそれぞれ次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- A ア さわさわ イ ほっこり ウ さらっ エ すぼん オ しれっ
B ア ぽつねん イ ふわっ ウ きくん エ すらり オ でくん

問十 空欄 **C** に入るもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- A ふっと笑顔を返す
イ しゃっきりとしたすましかたをする
ウ におうようになまめかしくなる
エ ちらりと捨て眼を置いていく
オ 無遠慮に人を見据える

問十一 傍線部2「からだのしんにぶすつと刺さって私にままっ子の針一本が、たしかにふるえていた」の意味としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- A 出て来た針に刺されて怪我をしたことに継母の怨みを感じて恐ろしくなった。
イ 自分の心の中にまだ解かれない継子としての感情が残っていることを自覚した。
ウ 時間のかかる作業に疲れて継子としてやるべき作業かどうか迷いがでてきた。
エ 継母の毒が自分にも刺さって自分の気持ちが萎^かえていくのを感じた。
オ どんなに針がささっても逆に継母に向かっていく気持ちで奮い立った。

問十二 傍線部3「しずまった胸にまた思いがのぼる」の意味としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 継母との感情の蓄積のように思われた針さしから針を抜いて満足したのに、残った毛玉が継母の存在そのものと気づき動揺した。
- イ 自分が手にもって握ったりしていた毛玉が死んだ人の抜け毛と知って気味が悪くなった。
- ウ 豊かな髪の毛が自慢だった継母に対するうとましい気持ちだが、抜け毛を見てまたこみあげてきた。
- エ 面倒な作業に熱中していたときには気づかなかった継母の思いの深さが抜け毛にこめられているようで怖く感じた。

オ 針が継母の怨みの象徴だと思い、抜いて安心したが、実は毛玉そのものが継母の憎しみであったことに気づき狼狽した。

問十三 空欄 a 〽 d に入るもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ（同じものを二度用いてはならない）。

- ア び、び、び、と快さが走る
- イ ふっと醒めて
- ウ すっと起き上がる
- エ 窮屈にころりとして
- オ 見まわして

問十四 空欄 D に入るもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 「よかったわあたし、もうままははじゃないもの。」
- イ 「ままつ子だつて楽しいときもあつたでしょ、ね？」
- ウ 「あなたもままつ子をやめればいいのよ。」
- エ 「ままははもきらいじゃなかったわあたし。」
- オ 「これで、ほんとうに、さようなら。」

問十五 この文章を説明する記述として内容に合致しないものを次のア～カから二つ選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 針さしから針を抜く行為に死者との感情のもつれを解くかのような意味を持たせつつ、自分の中のしこりをも溶かしていった経緯をほのかな情感を込めて述べている。
- イ 気の強かった継母のあつけない死に直面した気持ち強い後悔とともに綴っている。
- ウ 身の回りのものを始末していくうちに継母の死を受け入れていった過程を丹念に記述している。
- エ 継母への思いが愛憎入り交じつたものであったことを今更ながら感じ、死を通じて初めて解放されたことを率直に述べている。
- オ 継母継子という関係に入ってしまったがゆえに、ひとかたならない感情のやりとりをするようになった不思議さを淡々と語っている。
- カ 身の回りの道具に生前の面影を見だし、継母が自分の思っていたような人間でなかったことに気づいた経験を切々と語っている。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

わすれ草我が下紐につけたれど鬼のしこ草ことにしありけり
わすれ草かきもしみに植ゑたれど鬼のしこ草なほおひにけり

鬼のしこ草といへるは、むかし、人の親、子を二人もたりけり。親うせにけるのち、恋ひ悲しぶこと、年をふれどもわすらることなし。むかしは、うせたる人をば、塚にをさめければ、恋しきたびに、あにをとと、うち具しつづ、かの塚のもとにゆきむかひて、涙をながして、我が身にあるうれへをも嘆きをも、生きたる親などに向ひていはむやうに、いひつづ帰りけり。兄の男、年月つもりて、おほやけにつかへ、わたくしを顧るにも、たへがたき事どもありて、思ひけるやう、「ただにては、思ひなくさむべきやうもなし。萱草といふ草こそ、人の思ひをばわすらかすなれ」とて、萱草を、その塚のほとりに植ゑつ。そののち、弟つねにきて、「れいの御墓へやまゐる」とさそひけれども、さはりがちになりて、具せずのみなりにけり。この弟の男、いと憂しと思ひて、この人を恋ひ申すにこそかかりて、日をくらし、夜をあかしつれば、「我はわすれ申さじ」とて、「紫苑といへる草こそ、心におほゆる事はわすられざなれ」とて、紫苑を、塚のほとりに植ゑてみければ、いよいよわするの事なくて、日をへてしあるきけるを見て、塚のうちに声ありて、「我は、その親のかばねをまもる鬼なり。ねがはくはおそるの事なかれ。君をまもらむと思ふ」と言ひければ、おそりながら聞き居りければ、君は親に孝ある事、年月を送れども、かはる事なし。兄のぬしは、おなじく恋ひ悲しみて見えしかど、思ひわすれ草を植ゑて、そのしるしを得たり。そこは、紫苑を植ゑて、またそのしるしを得たり。心ざしねんごろにして、あはれぶ所すくならず。我、鬼のかたちを得たれども、物をあはれぶ心あり。また、日のうちの事を、さとの事あり。見えむ所あらば、夢をもちて示さむと言ひて、声やみ、また、そののち、日のうちにあるべき事を、夢に見る事おこたりなし。これを聞けば、紫苑をば、

事あらむ人は、植ゑて常に見るべきなり。

事あらむ人は、植うべからぬ草なり。されば、「万葉集にも、萱草をば、しこの草とは書けるなり」とぞ人申しける。

〔俊頼髓脳〕より

問十六 傍線部 A 「うち具しつづ」の意味としてもっとも適當なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 準備を整えながら
- イ 心の内を話しながら
- ウ 供え物を持ちながら
- エ 連れ添いながら
- オ ともに暮らしながら

問十七 傍線部 B 「まゐる」の敬意の対象としてもっとも適當なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 親
- イ 兄
- ウ 弟
- エ 鬼
- オ おほやけ

問十八 傍線部 C 「る」と文法上同じ働きのものを問題文中の波傍線部①～⑤から選び、その解答欄にマークせよ。

問十九 傍線部 D 「しるし」の意味としてもっとも適當なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 証拠
- イ 効果
- ウ 合図
- エ 是非
- オ 病気

問二十 傍線部 E 「そこ」が指すものとしてもっとも適當なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 親
- イ 兄
- ウ 弟
- エ 塚
- オ 夢

問二十一 傍線部F「と言ひて」とあるが、この発言はどこから始まるものか。もつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア おそりながら聞き居りければ
- イ 君は親に孝ある事
- ウ 兄のぬしは、おなじく恋ひ悲しみて見えしかど
- エ 我、鬼のかたちを得たれども
- オ 夢をもちて示さむ

問二十二 空欄 G と H に入るもつとも適当な語句の組み合わせを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- | | | | | |
|---|---|------|---|----|
| ア | G | うれしき | H | 嘆く |
| イ | G | かなしき | H | 喜ぶ |
| ウ | G | たのしき | H | 失ふ |
| エ | G | はかなき | H | 忍ぶ |
| オ | G | ゆゆしき | H | 急ぐ |

問二十三 この文章の内容に合致しないものを次のア～オから二つ選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 兄のほうは宮仕えに差し障りが生じ、家の中でも耐え難いことがおこってしまった、塚のそばに萱草を植えた。
- イ 弟のほうは、兄がたびたび都合が悪く親の墓参りに行けなくなってしまうのを非常に不本意に思った。
- ウ 弟が紫苑の草を塚に植えたのは、それが心に刻んだことを忘れさせない草だからであった。
- エ 塚の内から鬼の声が聞こえてきて、自分は親の屍を守護する鬼であり、怖がる必要はないと言った。
- オ 弟は、その日のうちに行なうべき事を鬼から夢で欠かさず告げられるようになった。

〔以下余白〕